

第二十五章 混沌の日々

昭和五十一年（一九七六年）の正月は穏やかに明けた。前年の秋には、国家公務員労組協議会（略称「公労協」）によるスト権要求ストライキにどう対処するかをめぐって、とりわけ国家公務員にスト権を賦与するかどうかなどについて政府と党の間に意見の対立も生じたが、三木首相が党側に譲歩し、スト権を与えないことに踏み切ったので、党内は無事に収まっていた。

三木首相は新年の記者会見で、新年度の予算成立後、四月か五月に国会を解散することを示唆したが、それも正月の賀を乱すほどのものではなく、一月二十三日には通常国会が再開された。

大平蔵相はこの国会の冒頭の財政演説で予算の大綱について演説し、物価の安定、国際収支の均衡、財政の健全化に特に配慮したいと述べたが、編成された予算は、前年度の補正予算編成時に提起された諸々の問題点をほぼそのままに受けついでものであった。予算規模は前年度当初予算に比べ一四・一％増、同補正予算（減額）に対して一六・六％増と景気面への考慮から五十一年度経済見通し（一三・〇％増）を上回る伸びとされたが、税収の落込みは変わらず、公債発行総額は七兆二千七百五十億円、このうち赤字国債は半分を超す三兆七千五百億円であり、公債依存度は二九・九％と前年補正後の二六・三％を上回るものとなった。

一月二十九日、予算の審議はいつになく順調にすべりだした。このまま進むなら、三月中に予算編成が終わり、首相の

言つように、四月から五月には解散、総選挙となるかもしれない——政界関係者はひとしくそう考えた。だが、それは、ほんのたまゆらのことではなかった。ロッキード事件の発覚が、状況を大きく変えてしまったのである。

ロッキード事件の第一報は、二月五日の朝刊の片隅にのつた小さな外電であつた。だがそれは、その日のうちに、未曾有の激震となつて永田町を直撃した。米国のロッキード社が日本に対する航空機の売込みのために、児玉誉士夫に対して七百万ドル（二十一億円）を支払つたことを公表したと、その外電は報じていた。翌六日には、ロッキード社の副会長コーチャンが対日工作資金として日本の政府高官に二百万ドル（六億円）を流し、これに実業家の小佐野賢治、商社丸紅の役員二人が関係していると声明した。

平穩裡に進行していた国会はにわかに騒然となつた。「日本政府高官」が誰かという疑惑は、自民党を一種の恐慌状態に陥れた。三木首相の対応もまた素早かつた。首相は、六日の衆議院予算委員会で、「日本の政治の名譽にかけても問題を明らかにする必要がある。手の届く限り材料を集め、法規に触れるなら嚴重に処置する」と「徹底解明」の旗を掲げたが、内容を明らかにすべき資料のすべては米国にあり、したがつて、まず流れたのは噂であつた。新聞報道にのつたローマ字のインシヤルを手がかりに、該当者の穿鑿がはじまつた。

野党は名指しされた人物の証人喚問を要求し、予算委員会は、証人喚問が自民党の主張する参考人の意見聴取かで紛糾した。結局、自民党が折れて、二月十六日から七人の証人喚問が行われたが、全員が容疑を否定した。十八日、政府は、改めて米国に「政府高官を含む全資料」の提供を要請、担当官の派米を決定したが、国会は、この事件解明の進め方をめぐつて、十八日から二十五日まで空転した。

この頃、大平は記者たちのインタビューに答えて、「いま全体としての対応ぶりは少し浮き足だっている。何があつたのか、いくつかの点は出てきているが、ピクチュア（画像）全体をいま少しふくらみをもつて構成しないといけないのではないか。自民党という政党は間口が広い。一局面にそういうことがあつたとしても、それで「自民党はそういう体質だ」とカテゴリーカル（無条件）にきめつけられることは迷惑だ……」と語っている。

「日本の国会では米国の議会に見られるような果敢な事実糾明をやるだろうか」という質問に対しては、「それは日本民族全体の『力量』にかかってくる。……ギリシャの歴史を考えても、最後は国民だ。……『力量』以上の解決はむずかしい。しかし、それ以下の解決は困る。日本人は相当の判断力にバランス感覚を持っているので、私はまずい解決はしないと思いますよ」と答えている。

二月二十三日、衆参両院本会議は全会一致で、米側に対し、資料提供要請決議を行った。だが、米側がこれに応ずるかどうかがわからない。三木首相は、参議院本会議の決議を受けて、ただちに自らフォード米大統領に親書を送ると表明した。「関係者の氏名があればそれを含めて、すべての関係資料を明らかにする方が、日本の政治のためにも、日米関係のためにもよい」というこの親書の内容は、二月二十五日発表された。結局、米側の司法上の理由もあつて、公開を前提とした資料提供は行われず、日米間の「司法共助協定」という形で資料が日本側の検察に示されたが、それにしても三木首相のこの行為は、その後の事件の解明のあり方と政局の方向を決定的に左右するものとなった。

大平蔵相は、三木首相の親書問題について、「実務者にまかせておけばよいものを、なんで政治のマトーにしなけりやならないのだ」と苦々しげに感想をもらした。大平には、去る昭和三十八年末の周鴻慶事件や、四十八年の金大中事件の時のように、こうした厄介な問題は、できるだけ政治のレベルに引き上げず、実務担当者のレベルで解決さるべきだという信念があつたのであろう。

「実務者が厳正中立に真相の究明に当り、真相が解明されれば司直の手で処断する。これがいちばんよい解決のみちで、政治はブレーキを踏んでもいけないが、アクセルを踏んでもいけない」と大平は言った。三木と大平は、この点において全く考えを異にしていたと言つことができる。

米側資料公開問題をめぐって国会は三月いっぱい空転した。もはや新年度予算の成立は不可能となり、三月二十五日、政府はやむなく、四月一日から五月十日まで四十日間の暫定予算を国会に提出した。五十一年度予算は五月八日に成立したが、四十七日も空転をつづけた国会は会期延長もできぬまま五月二十四日に閉会し、財特法ならびに値上げ法案はすべ

て審議未了となり、景気対策には大きな打撃となった。

さらにひどい状態に陥ったのは自民党の衆議院議員たちであった。総選挙までどう長くても五カ月しかないのに、党は世論の袋だたきにあい、飄々たる非難の中で国民の審判を受けなければならない。これを助長しているように見える三木首相の態度に不満がつつた。椎名副總裁の「三木ははしやぎすぎる」という言葉が、これらの批判を代表する表現として政界を駆けまわった。椎名は、三木を総裁に裁定して以後、間もなく独禁法問題その他の扱いで三木政権に不満を抱いたが、その後、時とともに批判を強めており、ロッキード事件が起きたとき、これを三木の「信頼と指導性を回復する絶好のチャンス」と感じたという。

当時、椎名と親しかった『毎日新聞』の池浦泰宏記者によれば、椎名は事件当初、三木に次のようなことを期待した。すなわち、自民党内閣でこのような事件を起こしたことを国民に詫び、事件の解明は検察の手に委ねる。司直の結論が出るまでの間、自民党の宿弊を打破するため、永年の懸案である党改革に着手することを宣言し、実行する。事件に關する司直の結論は謙虚に受けとめ、党として世論の納得のいく処分をする。党改革の体制が整ったところで、全責任をとって、総裁を辞任する。

だが、三木首相の動きは椎名副總裁の期待するところとは全く違っていた。党の総裁として自分の責任を感じるどころか、ロッキード事件を自分の政権維持の道具に使うとして——少なくとも椎名にはそう見えた。こうして冬から春にかけて、椎名は、三木に退陣を迫る工作に動きはじめた。自分が選出した三木が党を破壊しはじめている——そういう責任感が、日頃無精で高齢の椎名をこうした行動にかりたてたとも言える。

椎名は密かに党内三木批判勢力の糾合に乗りだし、五月七日には田中、九日には大平、十日には福田と二連の会談を行った。これによって、四者は総選挙前の三木退陣という筋書きに合意したのである。

椎名側近の構想は、国会終了後、直ちに行動に移り、椎名暫定政権を樹立した上、党改革と党首選挙の挙党体制を確立しようというものだったと言われる。

ところが、これは『読売新聞』のスクープするところとなり、五月十三日に、一面トップでこの記事が掲載されるや、永田町は蜂の巣をつついたような騒ぎとなった。

これを知った三木首相は直ちに反撃に出、その日の午後、日経連の定期総会のあいさつで、「政局を混乱させることは、国家国民のために許されない」と述べて、椎名らの動きを牽制する一方、福田、大平らと個別に会談して、『当面協力』の約束を取りつけた。

これまでのいきさつなどから、大平が三木首相に対して抱いていた批判は容易に想像できるが、だからと言って、現職首相・総裁の退陣を迫るだけの決意をもって取り組んでいたのか、もしそうだとするなら、新聞スクープ後の三木の反撃によって、何故、やすやすと『当面協力』へ矛を収めてしまったのか、疑問が残る。ある親しい記者は、当時の大平を評して、「おとうちゃん（大平）は、あのとき、三木を立てて行く以外に仕方がないのかと思ったり、椎名さんに局面打開の期待をかけたリ、アンビバレントな行動が多かった」と語っている。

さて、椎名らの工作が明るみに出ると、マスコミは一斉に『ロッキード隠し』としてこれを非難した。

だが、三木にとつて、大平はおろか福田までが椎名とともに反三木に踏み切っていたのを知ったことは、大きなショックであった。それは三木政権樹立時の主流であった椎名、三木、福田、中曽根四派のうち半が反主流にまわり、主流派が少数に転落したことを意味していたからである。

そこで三木は、「事件の徹底説明は三木内閣の責任」という旗をさらに高く掲げて、党内における劣勢を世論の支持でカバーする戦術をとった。中曽根派の稲葉修法相も「三木内閣は国民からロッキード事件説明の負託を受けている。……検察当局が意気阻喪する事態があつてはならない」とこれを支援した。

そういう中で、大平は五月二十五日の宏池会の定例総会で、これまで控えていた政局に対する発言を行った。

「いま、自民党はロッキード事件で全国民から批判を浴び、大変な危機を迎えているが、これを乗り切るには全党的な結束が必要である。これには、これまで一貫して長期政権の座にある間に党のいろいろな部分にたまってしまったア力を自

ら洗い落とさなければならぬ。全党が“ミソギ”をするつもりで体質を改革し、反省して、新しく出直さなければならぬ。だれかが悪いと言うのでなく、全党員一人一人の問題として受けとめねばならぬ。とりわけ、党や内閣で枢要な地位についてきたものは、私を含めて責任を感じてやめるべきである。……すでに全党的な出直しという黒潮の大きな流れはそこに流れている。さざ波は立つても大きな底流は進んで行くであろう。同志諸君は、このさざ波に惑わされることなく、一致団結して事に当たってもらいたい。」

これがいわゆる大平の“ミソギ”発言である。彼はおそらく、黨員が、一方は“三木おろし”に、他方は“真相究明”にのみ目を奪われている状態から、時代が自民党に要求している“肅党”に目を移すよう訴えたかったのである。しかし、その表現は抽象的であり、具体的な目標やそれへの手順は明確ではなかった。

ミソギ論の意味や内容について、記者たちから質問された大平は、記者団に対して、「“ミソギ論”は党・政府首脳の退陣というネガティブな面だけで受け取られて困っている。将来、大改革に取り組むというポジティブな面もあるのだ」と説明している。大平自身、今後の方向について苦慮し、模索していたのであろう。

解党をして新たな理念のもとに新党を結成すべきか。これなら過去のしがらみを捨て、志も新たにこれからの時代に立ち向かうことができる。しかし、それには時間が問題である。党名や党規党則を変えて出直したらどうか。不十分かもしれないが、再出発の証にはなる。だが、心理的抵抗もある。それなら党規を抜本的に改正し、出直し党大会をやるのはどうか。無難ではあるが、不徹底のおそれがある。

だが、いずれの手段を選択するにしても、大平はこの問題を自分の政権獲得の道具に使う気はなかった。

それとはかく、大平は、肅党を打ち出してみたものの、燃えさかってきたロッキード事件が一つのヤマを越さない限りは、全党の受け入れるものとはならないと感じていた。

この頃には、椎名は、三木首相の反撃によって、世論から“いじわるじいさん”という烙印を押され、舞台の表面を去っていた。

大平は、六月七日、親しい記者との会談でこう語っている。

「椎名さんは、ロッキード事件の解明は検察がやるものと考えていた。ところが、国民は三木と検察を二重写しにして、三木退陣工作を『ロッキード隠し』としたわけだ。それが椎名さんの最大の誤算だ。起訴が出る時が分水嶺になる。政局はそれまで動かしようがない……」

この頃、国会では、設置されたロッキード問題特別委員会が次々と民間側の証人を喚問して事件の糾明にあたり、一方、党内では、実力者たちが会談を重ねて、事態收拾の方法を模索していた。

そういう中で、六月十三日、自民党の河野洋平、山口敏夫ら六名の若手・中堅議員は、党の『金権・派閥・長老政治』を不満として、保守新党結成の方針を表明し、三木首相に離党の意を伝えた。（河野らは、二十五日、新自由クラブを結成する）

三木派と反三木派の確執はもはやどうにもならぬところまできていたが、いずれにしても、しばらく事件の成行きを見るほかはないという点で一致した長老たちは、六月二十一日、三木、椎名、灘尾の三者会談を行い、四項目の合意が発表され、抗争は一時休戦の形をとった。だが、両者の間に実質的な歩み寄りは見られなかった。

この少し後、三木首相と大平蔵相は、フエルトリコのサンファンで開催された先進国首脳会議に出席した。大平は七月三日夕刻に帰国したが、その夜、夜回りに来た記者たちに対して、サンファンにおける三木・大平会談の内容を次のように説明した。

「三木さんは『ロッキードのことについて、自分は何も報告を受けていないし、報告を求めようともしていない』と何回も繰り返していた。ぼくが『党の問題はロッキード以前からあった問題なのだ。そこへロッキードが重なった。……だからと言って、現在、野党に政権を渡すわけにはいかない。体制を立て直しつつ政権を全うしなければいけないからむすか

しいのだ」と言うと、三木さんも「全くその通りだ」と言った。」

この談話が正しければ、大平は決して椎名と同じように、三木に対して強く政権の交代を求めている。何よりも「肅党の実現をどう果たしたらよいか」、彼の思いはそこに集中されていた。サンファンの会議ではキッシンジャー米國務長官と隣り合わせで食事をし、キッシンジャーから、「三木で総選挙をやるのか、あるいは新指導者の下でやるのか聞かせてくれ」と言われ、「ぼくにもわからない。渦中にいるとかえってわからない」と答えている。

一方、三木、大平のこの訪米に前後して、ロッキード事件は最初の逮捕者を出した。六月二十二日には全日空の幹部三名と丸紅の専務一人、つづいて二十九日、七月二日、七日、八日、九日、十三日と贈賄容疑者が逮捕され、政界関係の収賄容疑者の逮捕は時間の問題と見られたが、それが誰であるかは、誰にも見当がつかなかった。

ただ、この頃（七月初旬）、三木は法相からの報告を聞いたあと、側近に対して、「党内では私に対する退陣要求などといっているが、これから捜査が進んでゆけばどうなるのか、それだけの力が留守部隊に残っているのだろうか」と語ったという。（中村著『三木政権・七四七日』）

そして、七月二十七日早朝、田中角栄前首相、樺本敏夫前首相秘書官逮捕の報が日本中をゆるがせた。

無実を信じ切っていた「盟友」の逮捕は、大平にとっては驚愕と苦しみ以外の何ものでもなかった。翌朝、彼は、親しい友人、政治家らに電話をかけ、「昨夜はよく眠れなかった。悲しいことだと思つよ」と言い、「空しい」という言葉を連発した。待っていたロッキード事件の解明がこのような形であらわれるとは——大平の顔には憔悴の色がかくせなかった。

三木首相は、田中前首相の逮捕によって、田中とその支持勢力に悩まされることがなくなり、政治の局面は転換すると考えていたにちがいない。世論もそう思った。だが、党内の事態は三木の思惑とは違った方向に進んだ。

第一に、反主流勢力にとって、三木批判がもはや「ロッキード隠し」として非難を浴びるおそれなくなった。第二に、ロッキード事件の解明を任ずる三木の役割は終わったという主張が成り立つことになった。

指導者を司直の手にとらわれた田中派は、三木首相に対して激しい敵意を抱き、八月四日の総会で、三木退陣を要求する決議を行った。

当時、遊説のため香川県入りしていた大平は、八月七日、琴平町で記者会見して次のように述べた。

「自民党の党紀の弛緩、党勢の衰退が表に出てから久しくなった。そこへロッキード事件で痛手を受けたので、本来なら自民党は野党に政権を譲り、自らはドック入りして、活力の回復をはかることが民主主義のルール、党再生のみのように思う。しかし、国民の間に、野党に政権を譲れとの声はなく、野党側にも受け皿の用意があるようには見えない。だとすれば、自民党としては自らの手で再生を模索するよりほかに道はない。課題は極めて厳しいが、時間の余裕はない……。自民党の実をあげるには、党内同僚の士と虚心に話し合って行くことに努めなければならない。福田氏が真剣、大胆に『出直し改革』を言われることは十分に理解できる。」

同行した十余人の記者団は大平発言について、「あとは福田でもいいという気なのかな」、「肚はできているという感じだな」と色めきたった。

大平がこの発言をした七日、福田は、群馬県に遊説中であつたが、その夕刻、大平発言を受けて、「大平蔵相の気持はよく理解できる」とエールの交換を行い、従来対立していると見られた二人に、連携の機運が進んでいることを見せつけた。

一方、自民党の中堅議員の間にも、党の現状をなんとかするために一役買おうという動きが高まり、中間派の議員三原朝雄らを中心とする派閥横断的な親睦会、「月並会」の有志たちは、三木首相に会見を求めて、天皇在位五十周年記念式典を機とした三木退陣を申し入れた。だが、九日、三木は自らの手で解散、総選挙に臨む決意を表明して、事実上この要求を拒けた。これは三原たちを憤激させ、「有志議員」は、反三木の連判状に署名をとるという行動に立ちあがった。

福田も大平も事態の平穏な収拾を図るため、党内抗争が表面化して以来、それぞれ数次にわたって三木と会談していた。

それは短い時間で三十分、長い時には二時間、三時間にわたった。しかし、会談は、具体的な解決策になると堂々巡りして、一歩も進まなかった。たとえば八月十一日にも、三木、福田は、都内のホテルで、午後五時から八時頃まで三時間近く話し合った。この会談で三木は、「進退をいつどうするか、私の口から言うわけにはいかない」という原則論に終始したように、会談後、福田は、「三木さんは『自分は世論の九十%以上の支持を受けている』と自信満々なんだ。どうしようもないよ」とだけもらした。

翌十二日の朝、その日予定している三木・大平会談を意識してか、大平は、「三木さんは権力にしがみつくだろ。力づくでギリギリのところまで行ったら、党分裂かどうかというところまで来ない保証はない。しかし時間がないのだから、臨時国会前に決着をつけなければだめだ」と決意を語った。だが、正午から、前日と同じホテルで行われた会談は、二時間に及んでも遂に進展はなかった。

会談後、記者会見に臨んだ大平は次のように言っている。

「三木さんからは、現体制で難局を乗り切りたいとの強い意向が示された。……この事態を乗り切って行くには、党員の協力と理解が得られなくてはならない。さらに広く国民の理解と信頼を得なくてはならない。三木さんが、現体制で何とかが行きたいというのは、それなりに理解できないわけではない。ただ、それが党内外の理解と支援を得られるかどうかだ。……皆が考えている問題や思いや願いをどのように吸い上げていくかを真剣に考え、しかも党を守っていかなければならない。むしろかしいことはよくわかるが、会談を重ねていく過程で合意し、相互に検討していかなければならない課題だ……。具体的方法はこれからだ。われわれは評論家ではない。限られた時間で何とかやっていかなばならない。」

要するに、具体的には合意も進展もなかった、ということである。福田、大平が攻めあぐねたというのが実相かもしれない。いずれにせよ、大平は、三木首相の歩み寄りのない姿勢に戸惑いと奇立ちを感じはじめていた。八月の中旬には、「……一つ一つ難局を乗り切るのに、現体制のままテクの坊のように突っ立っていて何ができるか。三木の方では何の青写真も示してこないじゃないか」と、この人には珍しく不快感を表明した。

こうした中で、三原たちが開始した署名集めは、燎原の火のごとく拡がり、わずか一週間の間に、田中、大平、福田の反主流派、ならびに椎名、水田、船田の中間三派の国会議員二百七十七名の多数がこれに賛意を表した。この連判状で集まった議員の会は、『挙党体制確立連絡協議会』（略称『挙党協』）と名づけられ、船田中、保利茂が代表世話人となった。

挙党協側の言い分は、「ロッキード事件を全党の問題として受けとめ、臨時国会前に三木総裁以下総退陣し、党大会を開いて肅党の実をあげる。そこで党刷新の具体的方針を決議し、これを実行に移す挙党的な新体制を確立する。この上で臨時国会に臨み、全党をあげた選挙体制で国民の審判を受け、政局を安定する」というものであった。

これに対し、三木陣営の主張は次のようであった。「ロッキード事件の解明は三木内閣の責任であり、国民の支持を受けている現体制で臨時国会に臨み、選挙後、新しい党体制を確立する。」

双方とも、選挙情勢がきびしく、それに耐えぬくにはどうしたらよいかという問題意識の点では一致していたが、その具体的方法が違っていたのである。

八月十九日、三原ら有志議員は二百七十七名の署名をそえ、両院議員総会の開催を要求したが、三木・中曽根執行部はこれを拒否したため、挙党協は上原正吉両院議員総会会長に両院議員総会の招集を求めた。この反三木側の動きとタイミングを合わせるように、ロッキード事件に関連して八月二十日には佐藤孝行元運輸政務次官が、八月二十一日には橋本登美三郎元運輸相が逮捕された。

八月二十三日、上原会長名で両院議員総会招集の通知が出された。日時は八月二十四日午前九時半から、場所は衆議院別館五階のホールである。

両院議員総会は、党大会に次ぐ党の最高意思決定機関で、ここで議決された決議は直ちに党議となる。緊急な場合は、両院議員総会の決定をもって党大会の議決に代えることができる」と党則上認められている。その成立要件は構成員の三分の二以上の出席であり、そして挙党協の二百七十七名はそれを超えていた。すなわち、もし、このとき両院議員総会が成

立するとすれば、それは党大会が持つすべての権能を持ちうるということになるのである。党則を変更することもできる。解党の決議もできれば、党員の除名もできる。党総裁、副総裁の任命もできる。だが果たして、党執行部が否認しているこの会合に決定機関としての正統性があるのかどうか。その点が明らかにされぬまま事態は進んでいった。

こうして開かれた両院議員総会では、三分の二の二百六十六名を一名上回る二百六十七名以上が出席したことが確認され、「総裁の首だつて取れるんだろ」という野次が飛んだが、決議は「臨時国会前に党一新を期する」という抽象的な表現におさえられた。

出席した多くの議員は、この会合によって大勢は決し、一挙に三木内閣を退陣に追いこめると考えていた。だが、問題はそれほど単純ではなかった。

三木退陣は挙党協運動の一つの前提であつて最終目的ではない。目前に迫つた総選挙に臨むにあたり、国民の審判に耐え、選挙を戦い抜く体制を確立して、政局を安定させる——それが挙党協の目的であり、挙党体制確立と銘打つた大義名分でもある。もし、三木首相を力ずくで退陣に追いやることができたところで、それをやつて政局が安定する保証はなく、総選挙も勝てるどころか惨憺たるものになる可能性の方が強かつた。一方、三木陣営は「党分裂も辞さない」というおどしをチラチラさせていた。除名を強行すれば、党の分裂は必至であり、「自民横暴」という批判が集中することは目に見えていた。

さらにもう一つの問題は、かりに両院議員総会が正式に成立したとして、それによって三木首相を総裁の座から追ふことができて、首相の座からおろすことはできないということである。国会を召集し、内閣不信任案を成立させて退陣を迫ろうとしても、首相の側には解散という手段が残されている。対立抗争のまま国会が解散されたのでは、そもそも挙党協の趣旨に反してしまふ。したがって、すべては円満話合いで決着をつけ、挙党体制で党の面目を一新し、国民の審判に耐える姿を作り出さなければならぬ。三分の二による党議という形は、話合いを速やかにまとめるための体制づくりにはすぎなかつたのである。

かくして、この党議と党の大勢を背景に、福田、大平の両者が三木首相と話し合うことになり、その会談に大きな期待が寄せられた。

福田と大平は、即日、二人揃って三木首相に会談を求めた。はじめは難色を示した首相も、井出官房長官らの説得によって午後五時から首相官邸の執務室での会談が始まった。会談は延々三時間にわたったが、その日は結論が出ないまま差し掛けとなった。

会談後、大平は、周辺に対してこの日の感想を述べた。

「話は、主として福田さんと三木さんがやって、僕は聞き手というか、話を整理し、進める役割をやった。福田さんがいろいろ説得するのだが、三木さんは話が少し進むとまた元に戻ってしまう。何度話しても、結局元のところに戻ってしまう。毀れたレコードのように一つところをグルグル巡っていて、いつまでたっても話が進まなかった。」

勢いこんで二人を官邸に送り、じりじりしながら会談の結果を待っていた拳党協の面々の顔には、失望の色が隠し切れなかった。

八月二十五日に開かれた二回目の三者会談は、当面の事態をどうするかという話に入った。大平はその問題点を八月二十七日の記者懇談会で次のように語っている。

「問題の焦点は、選挙前の政局一新をどうサジェストするかだ。退陣時期の明示は無理だろう。これも信頼関係があれば簡単だが、これが危殆に瀕している。私は総選挙前に党大会を開いて、たまったア力を落とすべきだという考えだ。三木さんは三者会談で『臨時国会中は解散しないことを総務会で約束してもよい』と言っていた。」

拳党協実行委員会（保利、鈴木、園田、江崎、長谷川四郎）は三木と福田・大平との会談結果に不満の意をあらわし、福田も大平も頼むに足らずとして、党議実現推進委員会を発足させ、保利茂がその座長となった。

党内の激突を憂慮した党執行部は、中曽根幹事長、灘尾総務会長、松野政調会長、石田幹事長代行、安井参議院議員会長の五役が事態を收拾するため妥協案を作り、三木、反三木の対立を斡旋しようとしていた。八月三十日、党五役は三項

目からなる收拾案を作り、これを三木首相に示して了承を取りつけ、三木は、福田・大平との会談でこの五役案を説明して、協力を求めた。

五役案は、

- 一、臨時国会前に、党、内閣の人事を刷新する。
 - 二、臨時国会を早期召集し、重要法案を処理する。
 - 三、臨時国会終了後、総選挙に臨む体制を整え、党内外に明らかにする。
- というものであった。この案は、政治的妥協案がほとんどそうであるように、読み方によって双方に都合よく読め、疑ってかかれどのようにも疑いうるものであった。

常識的には、三木首相に臨時国会中は解散はさせないとも読めるが、解散のみちが全く封じられているわけではない。また「総選挙に臨む体制」というが、これも総裁の進退問題がどうなるのか明らかになっていない。

福田と大平は、三木首相から五役收拾案の説明を受けた後、党本部で記者会見し、「五役案の趣旨は理解した」と発言をしたが、拳党協は猛然とこれに反対した。「このようなあいまいな案で臨時国会に入れば、三木のことだから解散で逃げに違いない」という対三木不信感が強かったのである。こうして拳党協は保利代表を表面に立て、あくまで両院議員総会の決議の実行を迫るという態度で執行部に臨むこととなった。

保利茂は、自民党きつての練達の士として知られていた。党を守り、政局の安定を図ることが政治の最大の課題だという考えの人一倍強い保利には、力を頼んで無理押しすることがどういう結果を招くかは、自明であった。それだけに保利は、「自分の城から一步も外に出ず、無理に引き出そうとすれば党分裂も辞さず」という構えを見せる三木首相を攻めあぐんだのである。

この時の保利の心境はどうだったか。久保糾（当時『毎日新聞』論説委員）は、次のように語っている。

「保利さんは、全く打つ手なしじゃ。党をこのような潰滅状態において、これを若い諸君に引きついで行かねばならないのかと思うと、わしは情けない。二十年、三十年、何のために政治をやってきたのか。先輩諸氏に申しわけない。——」

久保は、その日、瀬田の太平邸を尋ね、保利との話の模様を一問一答の形で太平に伝える。

久保の話に耳を傾けた太平は、「細い系かもしれないが、しかしやってみよう」と言つてニヤツと笑つた。太平には、もうそろそろ決着点に來たという考えが生まれてきていたのである。またこれを裏づけるような情報も得ていたにちがいない。腹心の副幹事長浦野幸男が、常時中曾根幹事長と接触していたし、田中六助からも各方面の情報が入れられており、太平は「党執行部が何とか事態を円満に收拾しようとしている」という手応えを得ていたのである。八月三十日の五役收拾案に、ここでもう一工夫すれば……。そして、もし、自分が動くとするれば、その相手は三木首相が信頼している中曾根幹事長でなければならない。

この夜、夜回りに來た記者との懇談で、太平は次のような比喻を語つた。

「或る若夫婦がいる。夫婦ゲンカがこじれてどうにもならなくなっている。それでは、双方の言い分を聴いてもらつて、最後の決着をつけようと家庭裁判所へ行く。そこで調停委員に『それなら断平別れてしまえ』と言われる。二人は最後だからということで裁判所の前の喫茶店に入っていく。お茶を飲みながら昔の思い出話などしているうち、忘れていた相手のよさなどを思い出す。小一時間ほどして、ニコニコしながら喫茶店を出てきた二人は『もう一度新たにやり直そう』ということになる。そういうこともあるのではないか。」

九月十日、三木首相もついに意を決した。党執行部が拳党協代表との話合いで約束した「十月中に臨時党大会を開く」という案を入れた総裁所信を發表し、それと同時に臨時国会召集のための閣議を開くことにしたのである。総裁所信の筋は、「総選挙に臨む党の体制については、十月中に臨時党大会を通じて、党内外に明らかにする。……来る九月十三日をメ

ドに臨時国会を召集する決意のもとに、必要な手続きをとる」というものであった。前段は、挙党協の主張であり、後段は三木自身の決意である。閣議を前に三木は、この方針を福田、大平に伝えた。

臨時国会が開かれてしまえば、解散は三木首相の意のままである。

福田、大平は、党内調整を理由に閣議決定を一日だけ待つことを求めたが、首相の決意は固く、召集予定日を十月十六日に延ばすことは譲歩したものの、臨時閣議を開く日については譲らず、閣議は予定どおり九月十日の午後五時から開かれることになった。

かねてからこのことあるを察していた挙党協側は、三木首相があくまで臨時国会召集を求めてきたら、所属の十五閣僚が閣議で国会召集の署名を拒否する方針を決めていた。三木首相も挙党協側の出方を十分承知の上の決意であり、対決はいよいよ閣議の席に持ちこまれ、党の分裂か、三木の退陣かを賭けたギリギリの瀬戸際にきた。

三木首相は、臨時国会召集について文句があるものは遠慮なく言ってくれ、そのかわり、自分の主張に反対の閣僚は辞めてもらいたい……という決意をにじませた高姿勢で閣議に臨んだ。これに対し、十五閣僚は、三木首相の行動に不信が強いとき、党内コンセンサスを得ないまま、何故、今日中に署名しなければならぬのか、党内調整のため一兩日の時間をかけるべきで、今日の手続きは待ってくれ、と署名拒否に出た。

政局收拾に当たっていた中曽根幹事長は、後にその頃を振り返って、「三木さんは、十五閣僚を罷免しても臨時国会の召集を強行し、冒頭解散に出る決意だった。その場合、はっきり党分裂も決意していました」と三木の非常な決意を語っている。

閣議は三木周辺の予想を裏切って短期決着はつかず、予定外の夕食休憩をはさんで断続的に続けられ、延々五時間及んだ。その結果、坂田防衛庁長官らの中立的閣僚の提案によって、その日の危機は回避され、臨時国会召集日は十六日とされ、その決定は十一日午後の持回り閣議で行うということに決まった。

この時の状況を中村慶一郎は、「首相が官房長官がこの閣議書を取りあげ、首相の隣に坐っていた福田副総理の前に置き

「『署名願いたい』といえば、決定的瞬間はその時に始っていたであろう」（中村著『三木政権・七四七日』）と回想している。

自由民主党が党分裂という結党以来最大の危機の縁を往きつ戻りつしたこの夜、大平邸には、いつもより多い夜回りの記者たちが集まっていた。

午後十時に閣議が終わり、十一時過ぎに帰宅した大平は、応接室で待っていた記者団から、閣議の模様、政局の見通しについて、矢継ぎ早の質問を受けた。記者団は大平の発言から、「三木の決意が固そうなので、明日は、十五閣僚の辞職を求めて、持回り閣議で臨時国会を召集するだろう。そうすれば、冒頭解散だし、党の分裂は必至だ」という印象を受けた。

この夜、大平邸を訪ねた田中六助は大平から、「このままでは党の分裂は必至だ。なんとかならないか」と言われ、翌朝大平に、中曽根幹事長との秘密会談による事態打開を提案した。

田中六助は次のように語っている。

「ものことは粘らなければいけない。大平さんに『中曽根幹事長に直接会ったらどうか』と言うと、『それでは電話しろ』という。僕が電話をかけると話し中だった。大平さんは手帳を出し、自分で別の番号を調べてダイヤルを回した。中曽根さんが出ると僕にしゃべれと言つので、私が『大平蔵相と会わないか』と言うと、『ふたつ返事で直ぐ会つと言つ』。」

大平と中曽根は、中曽根の個人事務所のあった北野アームス（平河町の角に近いビル）の七階で、差して三十分あまり会談した。実は、この時が党の分裂を回避するギリギリのタイミングであった。

「あの前から事態收拾の動きはありました。党五役收拾案が出された段階から、打開工作が進められていたのです。私は、十一日の朝、電話で『会って話し合わないか』という連絡を受けたとき、これで事態は收拾されると直感しました。大平さんも私と同じことを考えておられたのではないかと思います。」

これが会談についての中曽根の印象である。

この会談は、時間にすればわずかであったが、事態が差し迫っていたのと、大平、中曽根両者が、三木、反三木両陣営の妥協について検討しつくしていたこともあって、実のある会談となり、次のような一つの收拾案が作成された。後に中曽根私案とも大平私案とも言われるものだが、いずれにしても、そこには收拾工作に当たった人々の考え方が凝集されていた。

- 一、両院議員総会を十四日に開き、総裁は所信を直接黨員に表明する。会議は節度ある整然たるものにするよう努力する。
- 二、先般の総裁所信による党大会を十月中に開催する。議題は総裁と党大会準備委員の間でつめる。
- 三、臨時国会において重要法案成立に一致協力する。したがって解散は考えない。この旨、総裁は議員総会で表明する。
- 四、午後五時に正式閣議を開き、臨時国会召集を決定する。

この四項目は五役收拾案や十日の総裁所信、また挙党協側の主張をそれぞれに盛り込んだものであった。

「幹事長提案」を持った中曽根の行動は敏速であった。この日の朝刊各紙は大きく「自民党分裂へ」と一斉に報道したが、大平はこれで分裂の危機は救われるという思いでいっぱいだった。

中曽根は、「大平さんに会ったあと、福田さんにも会いました。三木さんにも会いました。三木さんは、『ああ、そう』と言ったが、迷惑そうな顔をしていました。三木さんにすれば『折角あそこまで決意したのに……』』ということだったのでしょう」とその日の首相の表情を語っている。

党側では直ちに五役会議が開かれ、「幹事長提案」で收拾に当てることを確認し、最終的には、三木・中曽根と保利・船田の両陣営の実力者四者の会談で決着をつけることとなって、午前中には三木首相にもその旨が連絡された。

挙党協側でも午前中に両院議員総会を開いたが、そこで、福田、大平、保利と並んだ三人の間では、福田が「中曽根幹事長の提案でまとめるか……」と言い、保利代表も「この両所、これで……ですな」と、息はピッタリであった。

「まるで迷走台風みたいだ。大雨を降らせたり、カラッと晴れたり、それでいてちつとも近くにこない」、「なんだかわからないが、解散だけはないらしい」と議員たちが、撫然としたり、安堵したりする幕切れたったのである。

大平・中曽根会談のため朝駆けの記者たちをスッパカして慌てさせた大平は、その埋め合せのつもりか、昼頃、国会内の議員食堂で昼飯とクリームソーダで、記者たちとの懇談を行った。四者会談が始まったという情報が入ると、大平は「いまちよつと喫茶店に入ったところだ」と先夜の離婚話にたとえて、ニヤッと笑った。